中学生は、今こう考える

―「少年の主張大会」から―

先号に続いて、「新潟県少年の主張三市中蒲原地区大会」に出場した新津市の中学生の作品を紹介します。連載の最後は、五中の昆さんの作品です。

自分を見つめる

五中二年　昆　綾子

「アッコ、元気か？」

数カ月前、上京している大学生の兄から電話がきた。その時の第一声である。

「あ、兄ちゃん！」

ついなつかしさがこみあげてくる。兄の元気そうな声に安心し、つい口もとがゆるむ。

「そっち変わりねえろ」

「うん、兄ちゃんも手紙ぐらいくれね」

ありきたりな会話だったが、感激で胸がつまりそうだった。

今年の三月まで、私と兄の部屋はふすまを隔てただけの二階にあったので、向こうが何をしているのか耳で感じとることができたから、同じ部屋も同然だといえた。兄が勉強する時間はだいたい夜の十一時からで、ふすまのすき間から私の部屋にもれる光が明け方まで続くことがしょっちゅうであった。英単語を暗記する声や、鉛筆が紙面をはしるかすかな音、うまそうにコーヒーをすする音などが、ステレオから流れてくる音楽の響きと交錯する。私は安心して眠れたものだった。

兄のそれは試験前夜も変わりがなかった。兄は受験といっても妙に殺気立った様子もなく、せっぱつまった感もなさそうな表情でいつものように毎日を生活していた。いくぶんか余裕のあるような感じもした。思い出すのは兄の高校受験の日。なんと受験票を忘れて、家に帰ってきたのだ。あわてふためいたのは母と私だけで、もう時間もあまりないというのに兄はあわてた様子もなく、もうバスにまにあわないからと、通りがかりの車に乗せてもらったのである。

「すごくいい人だったよ」と兄はうれしそうに帰ってきた。試験は見事パスした。何事にも穏やかで、そして大らかでいつも心にゆとりを持っていた。何かを述べるにもたくさんの言葉を必要としなかった。いわば簡潔で無口な人だった。

昆　綾子　さん

母はよく、私と兄が逆になればいいのにとぼやいていた。つまり兄が女性に生まれれば良かったというのである。確かに私は短気で頭に血がのぼりやすいし、口より先に手がでてしまう。せっかちな人間なのだ。手も不器用なのに対して、兄はよく私に料理を作ってくれたりした。理性的に行動する兄と、いくらか衝動的(ぐ)な私とでは差がありすぎるのである。だから私は兄を尊敬しているし、また、ねたんでもいるようだ。

私が兄に一番感心したのは数年前だった。兄が今の私と同じ中二から中三ころまで、ある学習塾へ通っていた。兄はそれこそ、雨の日も風の日も、一日も休まず通いつめた。それも自転車でだ。夜間、相当長い距離を、勉強のためだけにペダルをこぎ続けた兄に、今さらながら脱帽する。勉強を"やらされている"のではなくて、"自分からやろう"という熱気に満ちあふれていなければ、とてもできないことだと思う。自分の将来だとかなんだとかは、今、目の前にある、自分自身に義務づけられていることを完全に消化しなくては成り立たないのだということを証明しているような感じがしたし、また、好きなテレビ番組も見ないで、それでも塾から帰ってきた時の兄の満足そうな表情に圧倒されたこともあった。何かに熱中している時の人間は、こんなにも痛々しいほど輝けるものなのだろうか。

それに比べて、私はいったいなにをしているのだろう。真剣にうちこめるものもなく、毎日をのほほんとくらし、ただ将来をボヤーッと夢みているばかりなのである。やらなければならないことはみんな"明日"まわし。なぜ、こうもちがうのだろう、同じきょうだいなのに。

兄は、ぶつかれるものに対しては、普段は見せない自己主張を激しくすることができた。兄は一時、キリスト教というものについて、大きな関心を持っていた。日曜日、いつもそれについての集会に行っていたらしい。突然、聖書を読みふけったりもした。父はその兄の行動を最初はげんそうに見るだけだったが、エスカレートしていくうちに、父はついに兄と二人だけで話しあった。一つの家族に二つの宗派があってもしょうがない。兄は断固反対した。しかしその声は淡々としていた。次の日曜日、兄が集会に行くのを父はだまって見ていた。

兄がうらやましい。私も自分をぶつける場がほしい。学校ではいたくもない部にいて、ただ言われるがままに動いている自分がたまらなくみじめだし、浮わついた気持ちで入部した自分がたまらなく憎らしい。なんでもいいから、全身全霊かけて情熱を注ぎこめるのはないだろうか。今の私は欲求不満のかたまりなのである。今、もし兄がいれば、それはもっと強まっていただろう。

とにかく兄は、私の尊敬と羨望(ぼう)の対象である、一つの越えられない山だ。彼を誇りに思う。夏休みの間はこっちへ帰ってきてくれる。何を話そうか、言いたいことがなんでもいえそうな気がする。でもまず言わなければならない。"おかえりなさい"と。そして改めて兄をかいま見て、自分自身を反省しようと思うのだ。

お買物、ご用命は市内で

ニイツ銘菓　雪かこい
駿　河　屋
ニイツ本町2　TEL(2)0543
祝儀・仏事式菓子
銘菓・雲太郎・松坂羊かん
田家屋
ニイツ本町4　TEL(2)0430

洋　裁…生徒募集
ドレスメーカー女学院認可校
新津ドレスメーカー
善道町2丁目　TEL(2)3066
昼・夜間部…本科・週2回クラス
入学随時

明治大正夜話 (66)

天保銭物語 (二)

阿達義雄

I　山本笑月の「掛取りと天保銭」

『日本国語大辞典』（小学館）の「天保銭」の所を見ると、『西洋道中膝栗毛』十四編上から「先が軽くっちゃァいけねへから天保銭を附ておくんだ」の例文を挙げているが、この文意について何も解説されてはいない。

これは、肩に担ぐ荷物に棒を通して担ぐ場合に、この棒の一端に数十枚の天保銭を重しとして結んで、担ぎ易くしたことを言ったものであり、これは一枚五匁五分（二〇・六グラム）という、銭貨の中でも最も重かった点に着目しての文句であろう。この例文は明治九年頃の条に見えている。

明治四年十二月に八十文（八厘）通用に格下げされてからの天保銭については、山本笑月氏の次の一文が実によく之を物語っている。

掛取りは天秤棒でかつき廻った

天保銭といへば今でも少々頭の足りない人間を連想する。当百とあって通用八十文、縦一寸六分、幅一寸の小判形、大きくて重くて携帯にはすこぶる難物、だが、物価の安い明治初期には、これでも相当魅力があって、文久や波銭二厘とは段違ひ、天保銭一枚手に入れば腕白連、鬼の首でも取ったやう。

二十五枚ひとさしが二貫、即ち二十銭　晦日の掛取りに二三本受取ると、風呂敷に包んで天秤棒の先につけて担ぐ、財布に入れて懐中などは思ひも寄らず、三両五両となるとカマスに入れて、三泣車に載せて行く。

親父の留守にドラ息子が持出さうとしても、精一杯で一円余り、この点は安全才一とはいふものの、当時天保銭三枚あれば、平民どもは奥山あたりに一日ブラブラして、昼飯を食って悠々と遊べたものだ。

街の子達は天保銭を黄ふと威勢が違ふ。橋の袂や横町にあった番太郎、火の見かたはら駄菓子など売る家へ夢中で駈付けて、さあ、何から買はうと、菓子箱を眺め廻す。

菓子はミジン棒に豆捻(ぢ)おいち、ねじ金、兎の糞、カヤの痰切れ、鉄砲玉、なんでも買へるぞと、日頃の鬱憤を晴らすつもり、乃至は軒先の縁台に据えた火鉢で、お手づからのボッタラ焼き、友達にも買ってやって、夕方までは天保一杯で大機嫌。

蕎麦はモリ、カケ八厘が相場、湯銭も大人八厘、八百屋乾物屋にも、ひとやま一袋八厘の札が見え、縁日の玩具屋前通りは八厘、そのほか、夏の氷水、ところ天、冬の甘酒、飴湯まで、たいていは天保本位、銅貨の一銭より大きいだけに慾のない連中は、この方へ手を出したが、たうとう明治十九年限り通用禁止、その後は全く古銭扱ひだが、今見ると、よくも、こんな無器用な恰好の銭を調法がって持歩いたものだと、つくづく感心。

（『明治世相百話』）

II　『当世書生気質』と天保銭

坪内逍遙の『当世書生気質』（明治18）は、明治十年代の一般学生の勉学生活というよりも、その遊興的方面を写実風に記したものであるが、ここには天保銭の才二次的な意味が見られる。

次に引用するのは才十回に見られる書生同志の対話である。

「ハ、、、、。また浄瑠璃の真似か、君もよっぽど山村に似て居るなァ。」

継原「だから君は天保、イヤ、ポカァんとして居ると人がいふョ。山村の義太夫は習った浄瑠璃、所謂本場の調子だアネ。僕のやらかすなァ、無茶苦茶の自得流で、節なんざァ臨機応変だ。僕と彼を同視するのは月とすっぽん…

……」

すなわち、ここでは天保銭という語が「間抜け」とか、「（頭が）足りない」などの意味に遣われている。これは百文に足りない八十文、一銭に足りない八厘ということに由来している。

このような例は『幕末百話』などにも見える。

これ等は天保銭の八厘通用ということを考えて決められたものであろう。

（新潟大学名誉教授）

訂正　九月一日号の「天保銭物語」(一)の中の「当日銭」が間違っていました。正しくは「当百銭」です。おわびして訂正します。

芸能祭にお出かけください

市民の皆さんの芸能発表の場である「新津市芸能祭」が、十月十一日(日)と十八日(日)に開かれます

♡古典芸能部門…十一日の午前零時三十分から視聴覚ホールで

♡バレエ・合唱部門…十一日の午前十時から市民会館大ホールで

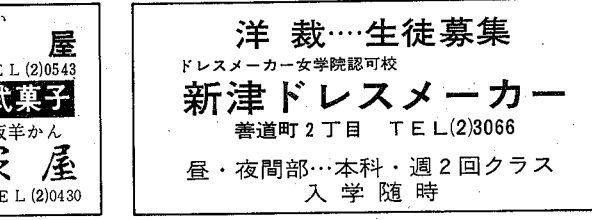
♡民踊・民謡部門…十八日の午前十時三十分から市民会館大ホールで

「この大新造様というのは新川の鹿島（酒造家）の娘で、十二代三谷三九郎の御家内です。

派手気な、江戸っ子風の老婦人で三谷家を切って廻すお方ですが、大旦那はどちらかというと天保銭の方でした。」（「今戸の寮」）

以上に述べたのは天保銭の二次的意義になるが、天保銭が八厘通用となってから、この八厘の天保銭が物価に影響を与えた痕跡としては、物の値段に二銭八厘、八厘などが多くなり、『当世書生気質』の才十一回に（二本八厘のかんざし店）というようなのが見える。

お買物、ご用命は市内で

自由に使える
低料金貸ホール
㈱三新軒事業部
TEL (2)-1111
新津市本町1－2－43

室＼時間	午前 9:00～12:00	午後 12:00～17:00	夜 17:00～22:00	全日 9:00～22:00
201号（30坪）	4,000円	5,000円	6,000円	15,000円
301号（72坪）	8,000円	10,000円	12,000円	30,000円
302号（30坪）	3,000円	4,000円	5,000円	12,000円